

第6回：屋代村塾を訪ねて

本シリーズの第1回「始めに」で農的生活の提唱者である大塚勝夫先生を紹介させていただきましたが、シリーズの続行中に先生の訃報に接するという、本当に残念なことになってしまいました。そこで今回、先生の御霊前にご焼香させて頂くと同時に、その後も農的生活に関わる活動が続けられている屋代村塾を訪問させていただきました。

屋代村塾のある高畠町は米沢の北方に位置し、雪を戴いた飯豊連峰や朝日連峰を見渡せる極めて自然に恵まれた地域である。平地には水田が広がり、山の斜面を利用したブドウやサクランボの栽培も盛んである。屋代村塾の前には田植えが終わったばかりの水田が広がり、牛舎からは牛の鳴き声が響いていた。ブドウの開花時期でもあり、整枝、摘果、その他の処理に忙しい時期にもかかわらず、先生の遺志を継いで屋代村塾の活動を続けてお兄さまご夫婦には我々の訪問を快く受け入れて頂いた。屋代村塾では主に周辺の農家が塾生となって、学生や場合によっては海外からの研修生を受け入れている。韓国夫婦を受け入れた塾生から、心暖まる交流のお話をうかがうこともできた。屋代村塾に併設されている五右衛門館には、伝統的な道具類が整備されており、いろいろな体験ができるようになっている。また、この建物はこれまで主に都会からの長期滞在者用に使われていたということで、高畠町には都会からの就農者の数も多い。

夜には蕨や蒟蒻に舌鼓を打ちながら、大塚様ご夫婦や塾生の話を聞く事が出来た。庭先から収穫したばかりのミョウガや蓴も食卓に並び、採れたての野菜のおいしさを改めて感じ、三里四方で採れたものを食べる自給自足的生活の持つ豊かさを再確認することとなった。こうした豊かさこそ、我々が高度成長の過程で失ったものではないだろうか。研修生が農村生活を体験すると同時に、こうしたことを感じることも屋代村塾の重要な役割であろう。ただし、大塚夫妻も指摘しているように、屋代村塾を運営していくことはそれ程容易ではないし、趣味的な農業だけでは日本の農業の将来はどうにもならないことも事実である。

我々は途上国援助の現場に身を置く人間として、利便性を享受しつつも大切な何かを失いつつある先進国での生活と、不便な中にも豊かさを感じることができる途上国での生活の両方を体験している。大量のエネルギーを消費する現在の文明が「持続可能」であるとは決して思えないし、途上国がこうした文明を目指すことにも疑問を感じる。自然と人間が共生し、資源の持続的な利活用を模索する中にこそ本物の生き方があるような気がする。今後とも、「自然と人間の共生」という考え方を念頭に置いて、国内における共生を目指した様々な活動や、途上国における持続的な開発に取り組んで行きたい。

最後に、心より大塚勝夫先生のご冥福をお祈り申し上げます。



屋代村塾



水田とブドウ畑



五右衛門館